

JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第36号

2022年3月5日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
chibajicasv02@gmail.com

本号目次

会長挨拶	1
活動報告会内容	1-4
出前講座	
公民館等	4-6
八街国際理解大学	6-8
会員だより (続)	
竹花 晃	8

会長挨拶 三輪 達雄

この紙上をかりて、今年度の我々の活動を総括したしたいと思います。

当会は、一般の方にシニアボランティアの体験から得た知見を社会に還元するという活動と、会員相互の親睦を図るという目的をもって活動しています。

この意味で、先日2月18日の第32回活動報告会を前回に引き続き中止せざるをえなかったことは、非常に残念なことでした。

これに伴って、我々会員相互の親睦の機会を失われてしまいま



した。しかし、これはコロナの大流行が収まるまでは致し方ないことと思います。会員の皆様、しばらくご辛抱ください。

一般の皆様には、報告会の予定原稿を、本誌に掲載しますのでご覧ください。

次に当会運営上の現状と懸案事項を申し上げます。

JICA統計によりますと、2021年12月現在、千葉県のシニアボランティア派遣総数は413名となり、その中のほぼ1/5の80名近くの方が本会に加入されていることとなります。

しかしながら、このコロナ・パンデミックの影響

で、本年度の会員数が20名ほど減少しました。また、2020年春募集より、シニアボランティアの定義に変更があり、シニアボランティアの対象者が大きく変わり、会員の募集対象者も激減しています。このため、青年海外協力隊千葉県OB会などの他団体との連携を模索しているところです。

今後とも、貴重な知見の社会還元であり、会員相互の親睦の場である当会を存続させる決意をもって、頑張っていきます。当面、成り行きについては不透明ですが、今後も会員のみなさまの変わらぬご協力とご支援をお願いいたします。

第32回 活動報告会 (中止) の予定発表内容

演題：ミャンマー情報通信技術研修所、研修教材刷新プロジェクト 島中一俊 (コンピュータ技術)

私は、2017年4次隊として2018年4月～2020年3月の約2年間ミャンマーのヤンゴンに派遣されました。職種はコンピュータ技術で、配属先は教育省管轄の情報通信技術研修所(ICTTI)です。既に活動中と帰国後とで2回投稿させて頂きましたので、本稿では、以前紙面の都合で割愛した情報を中心にミャンマーでの活動について報告します。

本題に入る前に少し自己紹介させていただきます。私は、通信キャリアに入社後主にソフトウェア開発技術者として働き、定年退職を機にSVに応募しました。応募が許される環境にあったことが幸運ですが、再雇用を辞しての応募なので、送り出してくれた家族に感謝しています。

最初に日常生活を紹介します。職場のある地域は、ダウンタ

ウン中心部から北へ約10kmの郊外で、複数の大学やIT企業が集まる研究開発都市の位置付けでした。赴任前は住居の解決が不安でしたが、現地の不動産屋が下見から契約まで親切丁寧にアドバイスをくれるので、全くの杞憂でした。職場



に近いアパートに住み、毎日8kmの早歩きをノルマとして、道草しながら徒歩で通いました。割合近場に大きなスーパーが複数あり道草には困りませんでした。ただ、同僚や近所の人が、事あるごとに目撃した旨報告してくれるのには驚きました。溶け込んでいると思い込んでいましたが、やはり外国人は目立つのでしょうか。行動に注意が必要だと思い知りました。また、店ではたいてい二ハオと挨拶を受けるので、世の趨勢を感じ取ると共に、特にコロナの流行り始めには気を遣いました。

ところで、皆さんは、途上国でのボランティアに不衛生で過酷な生活を想起していませんか？しかし、実際私の場合はかなり恵まれたものでした。そもそも私の職種にはPCやネットが必須で、必然的にインフラが整備されています。また、教員や学生は裕福な家庭の出身者が多く生活レベルは高そうでした。その意味では、求められる支援にも日本国内と同様に高い技術力が要求されます。また、強いられる訳ではありませんが、休日にもアパートで朝から深夜までプログラムと格闘することが珍しくありませんでした。ただ、苦しい反面やり甲斐があり、思い返せば、所期の目標の達成と夢中で過ごした日々はまさに至福の時でした。

最後に、職場関係以外の現地での交流について紹介します。業務の一環としては、手始めに現役時代の人脈を活用し、現地法人の重役や大学教授らと交流して情報収集を図りました。このうち一社は設備の寄付や卒業生の採用に繋げることができ、嬉しい成果となりました。業務外の交流では、脱サラ

して現地で洋服を製造・販売する邦人と知り合い、定期的に飲む仲になりました。この友人からはミャンマー人に関する鋭い洞察を貰い、日常生活での疑問が氷解し、さらに日本人について改めて考えるきっかけを得ました。こうした経験は、国内で会社員として働く日常では得難いもので、まさに人生の宝物となりました。



演題：南アフリカの職業訓練の課題

吉田 啓一（職種：建築）

南アフリカではアパルトヘイト政策が終焉した1994年から、黒人も白人同様の教育を受ける機会が与えられ、さらに、人種間の格差を是正するため、企業は一定数の黒人を雇用する義務のほか、会社設立には役員の50%以上を黒人と規定するなど、黒人優遇政策がとられている。治安悪化の主要因である高い失業率の対策として、政府は全国に55校の職業訓練センターを設けており、就学率を上げるため授業料は免除され、生徒へ移動費、食費、宿泊費を補助しており、貧困層はこの補助を受けて家族の生活が成り立つ状況にあるとされている。生徒の多くは黒人であり、黒人向けの生活保護政策とも取れる。

首都ヨハネスブルグからバスで7時間、人口一万人余りの小さな町モパニ職業訓練センターへ派遣された。同センターの建築科の科長から講師の指導力の向上、CEOからは卒業生が就職できるようにするための戦略を担当と考えてほしいとの要望を受けた。モパニは鉱山開発とともに発展した町で、鉱山で働く労働者と家族の居住区（タウンシップ）の住民は99.9%が黒人



である。職業訓練センターも校長はじめスタッフ、講師の多くは黒人で、生徒は全員が黒人であった。

講師は製図が不

得意で図面を理解できず、書けないことから、製図の指導法を教えることになった。模型や写真の形を2Dの紙に書き落とす練習が講師も生徒も苦手で、書こうとすると図が歪み、中にはフリーズしてまったく手を出せない生徒もいた。木片の模型を作り、それを幾通りか組み合わせて形を変えながら、どう描くかの練習をしたところ、多くが理解するようになった。講師によると、積み木遊びは知らないそうで、幼児の時の遊びや初等教育に製図を不得意とする背景があると見られる。若いころ十分な教育を受けられず、また、実社会で働いた経験がなく自信をもって教えられる講師が多いのが、講師の指導レベルが低い原因と思われる。

卒業生の就職について、日本と比べると考え方に大きな違いがある。日本では、訓練センターの卒業証書に意味がなく、訓練の終了前でも技術を身に付け、就職先を見つけるのをセンターでは推奨している。就職先の企業案内を教室で見ることができ、企業の訪問も多く、社会ニーズに合った訓練が実施されており、訓練生の就職率は90%を超える。

一方、南アフリカでは、担当の高等教育省を含め卒業生の就職を把握しておらず、就職率のデータもない。学科定期試験や進級試験の結果が重視され、その成績で訓練センターと講師は評価を受ける。モパニ校の64人の卒業生に聞き取り調査を行ったところ、就職できたのは3%、上位学校へ進んだのが10%、訓練センターのインターンで働いているのが6%で、81%は卒業後就職できていない。

出前講座で訪問したケープタウンの訓練センターはモパニとは大きく異なっていた。校長はじめ教員の多くが白人で、生徒も半数は白人とアジア系であり、授業中に庭でトランプ遊びをする生

徒は見られず、教員は熱心に指導していた。同センターは教育指導の質が良いのと地域に就職先が多いことから、おおよそ、卒業生の約半数は就職している。南アフリカ国内の地域格差が

問題だが、訓練センターの幹部・講師の交流や講師などの人事異動を行うことはない。南アフリカの職業訓練の課題はアパルトヘイトの影響が大きく、今もその影響を受けていると思われた。

演題：香港から見た中国 -異文化の認知と共生-

北垣 勝之 （職種：人事管理コンサル他）

モンスター中国の現況

今日、世界中の人々が中国の動きに刮目している。香港が中国の統治下に置かれて25年になる。本題を述べるにあたって、まずは中国国勢の現況を俯瞰しておこう。

中国共産党が創立(1921)されてから100年、人口は14億4186万人、第2、3位のインド13億6642万人、アメリカ3億2901万人(以上2021統計)を凌ぐ大国である。GDPは2012年に日本を抜き世界2位へ、アメリカ2兆6753億ドル、中国16兆6423億ドルで第3位の日本は5兆3781億ドル(以上2021統計)である。ただし一人当たりGDP(2020年統計)で見ると中国は世界64位(10,511ドル)となり、香港15位(46,667ドル)にも遥かに及ばず。

次に中華人民共和国の行政区分を確認しておこう。中国は22省、5自治区(広西チワン族、内モンゴル、寧夏回族、新疆ウイグル、チベット)、4直轄市(北京、重慶、上海、天津)、2特別行政区(香港、マカオ)で構成される。また主要都市のランキング(2021人口準拠)を見ると、上海・北京・重慶・天津・広州・深圳・成都・南京・武漢・西安・杭州・東莞・香港・佛山・瀋陽・蘇州・哈爾濱・大連・青島・鄭州の順になる。しかしGDP(US\$)/人(2020)では先に挙げた香港が断トツである。(北京:23,908 深圳:22,846 上海:22,560 US\$) やはり香港は国際都市国家時代の威厳を未だ保っているようだ。

香港の生い立ち

ときは16～17C、欧州に絶対主義国家が台頭する。彼等は重商主義のもと世界に乗り出し、遠くアジアまで交易域を広げる。その頃の中国は清国、広州珠江河口あたりでは列強との密貿易が盛んに行われた。大英帝国も良港を求めて一寒村に過ぎなかった新界に拠点を設ける。それが清英の阿片戦争によって大きな転機を迎える。南京条約(1842)で香港島の永久割譲、続いてアロー号事件による天津条約(1858)で九龍半島割譲、これによって英国による植民地化が本格的に始まる。その後、新界の租借権も得て全香港の99年間租借が決まる(1898)。

欧米諸国の清国侵食が進む中、英国は東インド会社を通じて行われた中国との茶交易をもって浸透していく。銀による決済が行き詰まりインド産の阿片を清国へ、その対価で茶を得て英

国に運ぶ。茶の効能が喧伝され喫茶文化が上流階級に支持された。一方添加する砂糖は贅沢品で、17C西インド諸島やブラジルのプランテーションから奴隷を代価に調達しプリティッシュ・ティは完成する。のち香港でもアフタヌーンティの余禄に与る。この間英国は産業革命を経て繊維産業をもって香港の殖産興業にも注力する。一時日本軍統治下(1941～1945)に置かれるが、その後、英国流民主主義の国際自由都市へと目覚ましい発展を遂げる。そして一国兩制、港人港治のスローガンのもと中国への主権返還(1997)へと歩む。

国際交流ディレクターとして

私が初めて香港を訪れたのは28年前、そこで中国返還前の約3年間を過ごした。丁度、香港が最も繁栄した時代だったように思う。私の任務はグローバル化に則した国策として、現地日本人を対象に彼我の文化交流を図ることにあった。そしてもう一つ国際学級を擁する新しい日本人学校建設計画の立案推進という使命もあった。これらの実践活動を通じて多くの異文化とも直面、それを享受し共生に導く楽しみを謳歌した次第である。

日本人学校の行事では香港社会と深く関わり合う機会を得た。地元テレビ局からは子どもたちの運動や舞踊、弁当持参や掃除習慣の紹介が放映され、また地域のお祭りや商用施設での和太鼓演奏、民族舞踊などは大好評を博した。世界各国の在港学校ともスポーツ交流を行った。子どもたちの日独サッカー戦や日米水泳競技会が印象に残る。運動会行事の相互招待では先生同士の交流親善も深めた。多くの国の運動会は単なる記録会で日本のようなマスゲームは行わない。なお中国では香港も含め主要都市名門校の教育レベルは高い。

魅惑の国際都市香港アラカルト

①世界三大金融センターの一つ、ロンドン・ニューヨークと肩を



並べアジアの重要拠点に

- ②スタートアップから不動産王李嘉誠まで、皆さん互恵精神で事業拡大、多角化をはかる
- ③健康・勤勉志向、そのための自然と社会環境あり(平均寿命、PISA学力調査で常に上位)
- ④風水(易)・風球(台風)・風見(機転)、地震(自信)はないが香港人は風を掴むのが上手い
- ⑤国家安全維持法やデモより仕事や勉強に精励、実利を目指す。それが正統華人の生きる道
- ⑥エンタメ・グルメ・ショッピング、文芸音楽スポーツに千客万来、後は観光案内でどうぞ
- ⑦'It's the little world'タガログ語のアマさんや世界各地から働き者がやって来る
- ⑧言葉は文化の鏡、広東語(香港人)・英語(外国人)・普通

語(中国人)と公用語の使い分け

- ⑨スモール・シンプル・スマートの3Sから高度にして濃密な都市機構の道筋が見える
- ⑩イギリスの古きに学び、中国の新しさを招く香港の存在価値は大きい

香港の中国化と中国の香港化の先へ

中国人から見ると香港は憧れの街に見えるらしい。家賃は高いが社会生活は便利で欲しいものは何でもある。自由と自然に溢れ政治に目をつむれば快適そのもの。そして今や香港は中国との人物金事が頻繁に往来する媒介都市として中国に影響を及ぼす存在となった。広州・東莞・深圳の経済開発特区の要であり、マカオ・珠海観光ともあわせ広東省全体への将来展望も描ける。それらが手拉手(シラシラ)、それぞれの特徴を糧に共生へと働く。

出前講座レポート (2021年8月～2022年1月)

「ブータンという国」

11月2日(火) 講師 三輪 達雄

八街市二州小学校において、標記のタイトルで、三輪達雄講師による出前講座が開催されました。

当日は二州小学校の公開研究会が行われ、八街市の他の小学校の先生方も多く参観にきており、4クラスによる授業発表の後、体育館にて公開講座が行われました。5, 6年生40名と先生方33名の出席の下、講演会が開催されました。

GDPを求めず、国民の幸福を求める国という観点から、服装、食べ物、宗教、習慣、言語教育などわかりやすく説明していました。また、動物への関わり合いの中で、狂牛病などの疫病が起こったとき、殺処分ではなく生かしながら対処していく宗教に基づく考えを伝えました。また、ポプジカ谷に電気を引こうというプロジェクトに対し、住民が反対した例を紹介しました。毎年冬になると渡ってくるたくさんの鶴たちが、設置する電線に衝突し怪我をするのを防ぐため、電気設置の方をあきらめたという話です。世界的な話題になり、最終的に地下に電線を引くことで電

気の利用が可能になりましたが、心温まるブータンの人達の考え方に感動するたくさんの生徒が見られました。

最後に、ブータンと日本の子供達の楽しみ方の違いについて、質問が出ました。屋外での遊びが多いブータンの子供達ですが、最近SNSが導入され始め、若い世代の中に少しずつ変化が見られるようになってきたことを紹介すると、大きくうなずいていました。緊張感漂う公開研究会での講座でしたが、終始穏やかな語り口でとても親しみの持てる講座になりました。(服部)



「世界の剣道から見た日本」

9月28日(火) 講師 添野 良一

柏市風早北小学校において、4年生4クラス126名に対して、添野講師により出前講座が行われました。

ウルグアイの生活について、詳しく教えていただきありがとうございます。メモを取りながら聞く児童も見られました。

児童にとって内容が少し難しかったと思います。剣道を習っている児童がほとんどいなかったため、実感が持てなかったかもしれ

ません。

改善点としては、児童の実態に合った、講演内容を実施していただけると、児童もより興味を持てると思いました。(管野教諭)



「中南米グアテマラ国の文化と生活」

1月1日(月) 講師 江田 隆正

柏市風早南部小学校において、標記のタイトルで、江田講師による出前講座が開かれました。

小学6年生62名に対して、45分という短い時間の中で、話していただきました。

内容は、グアテマラ国の概要、世界史的な視野の中のマヤ文明の歴史、講師の活動内容、現在のグアテマラ国の現状と課題でした。

講師の活動内容であるグアテマラのゴミ問題については、詳しく説明していただきました。

講師が現地で行った環境教育において、グアテマラの小学校の様子も詳しく説明していただきました。生徒も同じ年代の環境の違いに驚いていたと思います。

ただ、貧困問題などについては、児童の基礎知識がないため、なかなか理解してもらうことが困難です。

グアテマラの

民族衣装や音楽など、児童にとって身近な事柄から、導入した方が良かったかもしれません。

また、使用するスライドの写真はパワーポイントに4枚を載せるのではなく、画面いっぱいに映し出した方が、児童にはわかりやすいと思います。(佐々木教諭)



「ペルーの人々と文化を知ろう」

1月30日(火) 講師 佐々木英夫

柏市手賀東小学校において標記のタイトルで、佐々木講師による出前講座が開催されました。

本校の全生徒53名を対象に体育館において、以下の内容を話していただきました。

1. ペルーのイメージは？
2. 地理的特徴
3. 世界遺産をテーマとした国際交流事業について
4. 日本語・日本文化紹介の講演会等、実践報告
5. ペルー各地の紹介と食文化

南米ペルーの文化についてわかりやすかったです。地形、気候、服、生き物、世界遺産、食、歴史等について、日本との違いがよくわかりました。

動画、クイズ等もあり、子ども達も楽しめました。

多文化共生社会の必要性、大切なことについてわかりやすかったです。

最後に、児童から、月に1回のみの電車についてと、へび、虫、ナマケモノの大きさについての質問がありました。

小学生に内容をかみくだいて伝えることは大変だったと思いますが、丁寧に話して下さり、子ども達もうなずきながら聞いていたので良かったです。

異文化を知る学習は貴重なので、とても良い機会でした。ありがとうございます。



「日本と世界のお祭り」

1月24日(月) 講師 影山 洵

柏市高田小学校において、標記のタイトルで、影山講師による出前講座が開催されました。

感染症対策により、小学6年生72名を対象に、クラスごとの講演に変更して実施していただきました。

講演では、世界地図に都市名を子どもたちが貼り付ける体験がありました。どの国にどのような都市があるのかを考えさせる良い活動でした。

民族衣装や、装飾に子どもたちは興味を持って身に付けていました。一枚の布が正装であり、この服装でないと村に入ることができない話を、とても興味深く聞いていました。

講師の元の仕事である貿易に関する話は子どもたちの反応がとても大きかったです。

輸出や輸入に関する書類の話や、輸送方法がコンテナであることなど、普段知ることができない話なので、たくさんの質



問をしていました。

「なぜ商社の仕事を始めたのか。」「取引をしていて、大変なことは何か。」「ODAでは、どのような援助が喜ばれるのか。」「危険な国はどこか。』という質問がありました。

生徒たちは、現地の様々な風景や、食べ物の写真をとても楽しそうに見ていました。特に食べ物の写真は見た目では何

入っているのが想像できず、とても興味深く話を聞いていました。

講師のたくさんの事を伝えたいという熱意を強く感じました。また、実体験に基づく貴重な話が聞けたことをうれしく思います。

今後も実物や写真を見せながら説明をしていただけると子どもたちの理解が深まります。

「素敵なパラオの人々」

1月26日(水)

講師 中村 時夫

柏市立増尾西小学校において、標記のタイトルで、中村講師による出前講座が行われました。

小学6年生102名に対し、感染症対策のため講師が別室から生徒の教室のプロジェクターに配信する方法で行いました。

講義は、質問形式で進められていました。児童には、事前に宿題のワークシートが与えられ、次のような質問を行い、児童とともに講義を進めていました。

- 1、JICAとは、どんな活動をするところですか？
- 2、パラオの国はどこにありますか？
- 3、昔パラオで戦争がありましたが、その結果はどうなりましたか？
- 4、パラオの人たちは、日本語が上手でした、どうしてですか？
- 5、パラオの人口は？、産業は？ どんな生活をしていると思いますか？（展示してある写真を参考にしてください）

最後に質疑応答の際に出た質問は、「パラオで有名な食べ物はありますか？」「パラオにどんな日本のものがありますか？」

「パラオではどんな日本食を食べていますか？」など、他にもたくさん質問が出ました。

中村さんは、元小学校校長の経歴を持っていて、話し方もとても上手く、聞き入っている児童が多かったです。

講演前に児童にパラオやJICAについて調べさせ、予備情報があったので話がより入っていたように感じました。ちょうど社会の時間で第二次世界大戦のことを学習しているので、学びが深まりました。

終了後に児童にどうだった？と聞いたら「楽しかった！」「や「勉強になった」など様々な意見が出てきました。



八街国際理解大学（中止：第1回、第2回、第6回、第7回）

第3回 2021/10/23 (土)

「ペルーとの国際交流の実践報告」

講師 佐々木 英夫

八街国際理解大学において、受講生14名に対して、標記のタイトルで佐々木講師が、第3回講演会を行いました。

講義の内容は、以下の項目です。

- 1) ペルーのイメージは？
- 2) 地理的特徴
- 3) ペルーでの所属機関について
- 4) 世界遺産をテーマとした国際交流事業について
- 5) 日本語・日本文化紹介の講演会等、実践報告
- 6) ペルー各地の紹介と食文化
- 7) 日本語普及活動について考える

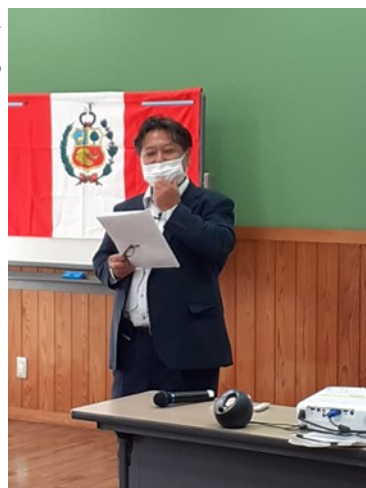
聴講者からは、「日本の企業進出が少ないのはなぜ。」「ペルーの治安はどうなのか。」「鉄道の発着が1日1本というのは

なぜ。」「ペルーの人の平均給与はどれくらい。』等の質問がありました。

主催者側からの感想としては、以下の3点です。

- ・ペルーについて世界遺産や文化、民族など多方面から紹介していてとてもわかりやすい講演だった。
- ・自作のビデオを使用したり、ケーナの生演奏などもあり、来訪者もとても満足していた。
- ・とても丁寧な言葉遣いで、クイズ形式のやりとりもあり、好感の持てる雰囲気でした。

改善すべき点は、以下の2点でした。



- ・スクリーンがやや小さく、後方からはやや見えづかった。
- ・スピーカーが小さすぎて、あまり機能していなかった。（講師

自身が用意したものを使っていた）（服部）

第4回 2021/11/27（土）

「南アジアの国々から学ぶ（スリランカ、ネパールより）」

講師 山崎 豊

八街国際理解大学において、受講生14名に対して、標記のタイトルで山崎講師が、第4回講演会を行いました。

講義内容は、スリランカの世界遺産、生活習慣、動植物、食べ物、交通事情など丁寧に説明しました。

・日本人に対する国民感情はとても良く、敬意を払ってくれている様子が良く理解できた。

・日本との関係では第2次世界大戦当時から関わりがあり、特にワシントン条約締結時に初代スリランカ大統領の演説が締結条件に大きな役割を果たしていたことがわかった。また、日本への目の角膜移植も申し出てくれるなど親日的な大統領だった。

・スリランカ社会の中で今でも残っている物乞いの人たちと一般社会の人々との日常的なコミュニケーションに暖かさを感じた。

・帰国後もスリランカとの国際交流事業や英語を使った数学授業の開発に尽力している様子がよく分かった。

受講生からの質問には、以下のように答えました。

質問：スリランカは中国に侵略されているような印象を受けるが、実際はどうか。

答え：スリランカ人の中国人への国民感情はあまり良くない。

99年間の借地権をとって開

発しているが、個人的には友好的な中国人達もたくさんいる。

質問：スリランカの治安やインフラはどのような状態か

答え：仏教国でも治安はとても良い。警察力がしっかりしていて、賄賂を渡すような習慣はない。インフラもしっかりしていて、市民生活は安定している。

主催者側からの感想としては、

・とても落ち着いた雰囲気での講座で、暖房設備もあり、感染対策を施した上での講座であったが、快適な状態で、講義をしていただいた。

・会場のプロジェクターや音響設備も整っていて、完全に機能し、講師はUSBを持参しただけで講座を実施することができていた。



第5回 2021/12/25（土）

「JICAの仕事を終わって」

講師 加藤 哲男

八街国際理解大学において、受講生10名に対して、標記のタイトルで加藤講師が、第5回講演会を務めました。

いままで講師が活動してきたインドネシア、ペルー、ボリビア、シリアでの出来事を中心に、そのエピソードを話し、海外生活での楽しさを上手に伝えていた。特定の国の紹介ではなく、体験の中から楽しかったことやびっくりしたことなどを伝えていた。

例えば、シリアにはチグリス川、ユーフラテス川の源流が有り、小麦が盛んだことから文化が花開いた。その場所を訪れたときの神秘的な感動を伝えていた。ボリビアでは、バス内での銃を持った警官からの取り調べを受けた事件に触れ、旅のトラブルもまた楽しみの一つであると紹介していた。また、活動していたシリアでの現状にも触れ、長引く内戦による紛争で多くの国民が海外に逃げだし、当時の同僚達は今でも苦しんでいる様子を語っていた。参加者達もいろいろな国における生活やその国独自の実

情などに真剣に耳を傾けていた。

受講者からは、以下のような質問があった。

・JICAに参加するにあ

たり、必要な資格や条件はあるのか

・JICAの組織そのものをよく知らないが、どのような組織なのか。

主催者側の感想として、

・とても明るく話しており、暖かみのある講演だった。

・パワーポイントの文字や写真が、やや不鮮明で参加者からは分かりづかった。



・たくさんの国の出来事が入り交じっていたので、どの国のことなのか分からないことがあった。

会 員 だ よ り (続 き)

ドルポ・トレッキング ―河口慧海の道を辿る

竹花 晃 (2004-06 ネパール 山岳博物館運営)

開発が進む中国チベットとの国境沿いの村

驚いたことに、シメンガオンと次の宿泊地のティンジェの中間から、チベットへの峠にはバイクの道ができており、中国とバイクで行き来していた。ティンジェにもチベットから沢山の物資が入っている。秘境と言われたドルポも開発が進み、おかげでラサ・ビールという缶ビールにありつくことができた。

11日には霧雨の中をモウラ5027mを越え、ついにツアルカに着いた。ツアルカはこの辺りの中心となる大きな村で、住居や緑の畑も多い。バイクやパラボラアンテナが見られ、放課後の小学校の校庭にはジャージのユニフォームを着た生徒たちが遊んでいた。「鳥葬の国」のイメージはないがまだやっているのだろうか。

今回のトレッキングの核心部



ツアルカから先のサングダまでは今回のトレッキングの核心部とも言える。川の徒渉は多いし、日本の山とは桁違いにスケールが大きく、急峻な崖も多く

気が抜けない。12日のノルブルンのキャンプ地は比較的水量の多いタサン・コーラを徒渉した対岸であった。

13日はニワール・パスの直下でテント泊。峠から少し行くとダウラギリの北方方面の山々が見えるはずだが、曇りでわずしか見えなかった。

14日は今回のトレッキングで最もハードなコースであった。ニワール・パスを少し過ぎるとカッチャル隊は、人間のルートとは大きく迂回して距離は長いが容易なルートを行く。人間はトゥチエラ峠を越えて行くが、峠から先は通る人は少なく、踏み跡も少なく不明瞭である。きれいな高山植物の多い広い谷を過ぎると、突然急峻な崖に挟まれた悪絶の谷と変わった。岩登りのアップダウンあり、ガレ場ありと緊張の連続である。ロープの確保はないし、ルートも自然のまま。これではカッチャルは通れる訳はない。結局、荷物隊とは合流できないため、次の宿泊地のサングダまで2日分、約12時間歩き、うす暗くなった頃着いた。

見慣れたカリガンダキが見えて、ジョムソンへ

15日はダガルジュンまで長い道のり。ジョムソンからサングダまでは立派な車の道が開かれていたが、通るのはごくたまに大型のトラクターだけである。ショートカットで半分位は花の多い山道を歩いた。

16日はジョムソンのホテルで久しぶりにシャワーを浴びてスッキリした。長らく天候不良でポカラからジョムソンへの飛行機は全く飛んでいなかったらしい。17日はやっと天候が回復し、幸運にもポカラに飛ぶことができた。懐かしのポカラに着くとひと安心であった。

トレッキングの詳細と、ここでは紹介できなかった「ドルポの花」はブログに記載していますので、ご笑覧頂ければ幸いです。ネパールの山と花と人 ブログ編 (livedoor.blog)

出前講座の講師登録してみませんか？

現在講師登録をされている会員の方は16名ですが、当会の活動計画を遂行するためには、まだまだ不足する状況です。

これまでは地域の学校、公民館等から出前講座講師派遣のご要請をいただいても、ご対応頂ける適当な講師の方の応募がなく、特定の会員に重複してお願いせざるを得ない例が何回ありました。

会員の皆様は、貴重な経験をされた方ばかりですから、皆様のお話は、地域の方々にとっても大変有益であり感謝されると確信しています。

当会では、約25名の講師を必要とする講座を企画しております。講座を引き受けても良いという方は、下記担当までご連絡いただきたく、お願い申し上げます。

出前講座担当: 佐々木 英夫
etsutohide@yahoo.co.jp

会員動向 会員数 77名 (2022年1月末現在) 派遣中の方はおりません。

・2021年6月から2022年1月末まで行われた出前講座等で、当会の会計に合計18,600円のご協力をいただきました。
中西、添野、小松、佐々木、江田、三輪、山崎、加藤、影山、中村(1000円の寄付有) ありがとうございます。